

茶山 健太 (Sayama Kenta)

2020～2021 年度奨学生

オックスフォード大学 地理・環境学部 博士課程

4 月にエッセイを書かせて頂いてからの 6 ヶ月間、私は自らの研究計画のうち、現地調査の必要が無い部分に関して研究を進めると共に、学会における発表などを行ってきました。また、5 月には Transfer of Status と呼ばれる、研究計画と文献調査をまとめた 40 ページほどのレポートと面接による審査に合格し、正式に博士課程の研究生 (DPhil candidate) と認められました。また、研究費の確保のため、複数の学術団体の助成金に応募し、そのうち 2 つの団体から少額の援助をいただけることが確定しました。このように、コロナ禍の影響を受けながらも、様々な面において、研究を進展させることができています。

4 月と 5 月までの期間は、主に Transfer of Status の審査に必要であったレポートの作成を行いました。このレポートでは、博士課程全体の研究計画、研究自体の必要性、また実施方法などを包括的にまとめ、指導教官ではない二人の教授に審査をしていただきました。審査の内容としては、新型コロナウイルスの影響による不確定要素はあるものの、研究テーマには独自性と、データに裏付けられた必要性が感じられるものであると、非常に高い評価をいただくことができました。そして、自らもこの過程を通じて、自分の研究計画と研究の方向性をより明確にし、博士課程全体の見通しを立てることができたのではないかと考えております。

具体的な研究の進捗状況としては、現在オ

マーンと UAE における、第四紀 (250 万年前から現代までの地質時代) のうち、特に、過去 20 万年前から、この地域の気候が現在の気候とほぼ変わらない状態になった 4000 年前ほどまでの環境 (古環境) に関する大地の遺産と、この時期の考古学遺産を地理的、そして時代的に対応させることのできるデータベースの作成を行なっています。5 月から 6 月の間にはこのデータベースの作成に地理情報システムを用いたデータベース作成専門のソフトウェアである PostGIS を活用することに決め、その使用方法を学ぶためオンラインの授業を受講しました。

このデータベースが対象とする時代は、我々の祖先が最初に出現したアフリカから、世界中に拡散していった時期です。現代は砂漠のイメージが強いこの地域ですが、実は時代によっては湖や草原に覆われていたこともあり、気候変動によって、環境がガラッと変わってしまう地域なのです。20 万年前から現代までを見ていくと、降雨量の多かった時代は、この地域にニンゲンが暮らしていた記録が残る時代と大きく重なっています。これは、この地域の気候変動が、ニンゲンの世界進出の鍵となったことを示すものです。

学術的な面から見ると、このデータベースは、今まで各研究者が各自で持っていたこの地域の古環境の研究に関するデータの一元化を可能にすると共に、数千年規模の気候変動が太古の人類の生活環境に大きな影響を

与えていたこの地域における、古環境研究と考古学研究の結びつきを明確化し、より深い理解を実現するものであると考えています。私は、この関わりをより良く理解し、世界の人々に発信していくことは、この地域の大地の遺産への理解を深めることにつながるのではないかと考えています。

また、登録されるそれぞれの大地の遺産には、過去二十年ほどの衛生写真を基に、現在の保全状態、そして消失、破壊のリスクの度合いを数値化した危機指数を設置しており、保全活動の第一歩として利用できるのではないのでしょうか。

現在は、大地の遺産と考古学遺産のデータをまとめ、PostGIS にアップロードするための準備を行なっています。このデータベースは、11 月を目処に完成させる予定となっており、その完成と中東地域におけるコロナウィルスの流行による渡航制限の緩和が見込まれる 12 月または 1 月には、初めての現地調査を行う予定となっており、より大きく研究を進展させられると考えています。

これらの研究成果の発表の場としては、5 月にヨーロッパ最大の地質学に関する学術機関である European Geosciences Union が毎年開催している学会にオンラインで参加し、自らの研究のうち、大地の遺産の危機指数の算出方法などについて発表を行いました。学会を通じて、イタリアの地質学者と連絡を取り、データの提供などにおいて、彼の協力をいただけるようになるなど、インターネット上の学会ではあったものの実り多いものとなりました。11 月には、トルコで開催される対面の学会に参加することが決まっており、初

めての対面での学会発表を楽しみにしております。

研究費の調達に関しては、この6ヶ月の間に、私は研究を進めるため、外部の学術団体から二つの助成金をいただくことができました。一つは、第四紀研究の学術団体 Quaternary Research Association から、トルコの学会に参加するための資金、そしてもう一つは、アラビア半島における研究に関する団体 International Association of the Study of the Arabia から、現地調査を行う際の資金をいただくこととなりました。貴財団からの援助に加え、これらの学術団体からの研究費の援助をいただくことができ、大変光栄であるとともに、より一層研究に励んでいこうと思う次第であります。

これからの研究の進展としては、データベースを完成させた後に、このデータベースにまとめた大地の遺産のうち、どの遺産を優先的に保全していくかを考えるのに必要になる評価基準の作成を行なっていく予定です。大地の遺産の評価体制はまだ歴史が浅く、そのほとんどがここ十年ほどの間に行われた研究を基に行われています。ただ、これらの研究のほとんどが欧州の大地の基準としており、乾燥地帯である中東の環境とはかけ離れたものとなっています。その上、評価基準そのものも、数人の専門家の経験によって作られた、具体的な根拠に乏しいものが多いのが現状です。この現状を踏まえ、私はより多くの専門家の意見を反映した評価基準を作成するため、参加する学会などにてアンケート調査を行い、中東地域の第四紀大地の遺産を評価するために必要な要素と、その比重を定めることができればと考えています。最終的には、

この評価基準を用いて UAE にて具体的なケース・スタディを実施することを目標としています。残り二年間となった博士課程ですが、援

助をして頂いている皆様への感謝の気持ちを忘れずに尽力していこうと思う次第です。

以上



▲UAE ジェベル・ファヤ遺跡周辺における発掘作業の様子
画像提供: アッシュ・パートン教授